

重度知的遅滞者における基礎的生活習慣の 形成と認知・適応能力の発達

西 信高*・花田 史朗**・斉藤 礼子**

Nobutaka NISHI* Shiro HANADA** and Reiko SAITO**

The Acquisition of Basic Self-Help Skills and the Development of Abilities in
the Cognitive-Adaptive Area in Profoundly Retarded Adults

Abstract

The acquisition of basic self-help skills, that is, toileting, bathing, toothbrushing and others has important meaning not only to relieve instructors from their work load, but also to free severely mentally retarded persons from restrictions in their activities. And the acquisition of such skills is not independent of their life, deficiency and development.

We tried to examine the relation between some kinds of such skills and cognitive development.

20 subjects are institutionalized and the mean chronological age of them is 31 years, 8 months.

Results indicate that many self-help skills tasks require 2 years of developmental age at least in cognitive area to be performed in response to verbal command and self-direction.

Members who often wet their pants show a tendency to find difficulty in performing the task to put a circular board into the hole which has been rotated in a 180-degree arc from the first position.

I はじめに

衣服の着脱、排泄等基礎的生活習慣の形成は、介護者の負担の軽減という意味を一方でもちながらも、他方、より基本的な視点として、障害者自身がその生活と健康、そしてまた、社会的諸活動を制限するくびきからみずからを解放する過程として位置づくものである。

したがって、基礎的生活習慣についての実態の把握、評価、指導方針等は、障害者の衣・食・住をはじめとする生活実態の他、その障害や発達との関連において検討されなければならない。Webb, P. C.¹⁾らは、排尿便や食事について、直接に指導しなくても、感覚運動的トレーニングによって改善されうることを実験的に明らかにしている。そして、そこでは、この実験が、施設収容後平均15.6年を経過した成人の「重度」知的遅滞者を対象

としたものであることが強調されている。長く施設で暮らし、さまざまな生活習慣の獲得が固定的に困難視されている人々にとっても、系統的、目的意識的などりくみがあれば、その困難を着実にうちやぶっていく可能性があることを示す一つの例証となっている。まさに「その潜在している能力を発見し、引き出し、開発し、発達を援助する努力を（指導者が）正しくできるかどうかにかか²⁾」っている。

実際、重度といわれるちえおくれの人々と生活をともにするなかでは、たとえば、ことばの獲得と排尿便の自立過程とが必ずしも独立しているのではないことなどが経験的にも感じとれる。また、あるひとつの生活習慣が獲得されることによって別の生活習慣が付随的・連鎖的に獲得されることも同様である。

小論は、以上の点をふまえながら、個々の基礎的生活習慣が具体的には相互にどのようにかかわりあいながら

* 島根大学教育学部障害児研究室

** 島根県立光風園

獲得されるのか、また、基礎的生活習慣が発達、とくに認識の発達とどのように相互連関をもつのか、といった問題についてアプローチしようとするものである。

ここでは、まず、ちえおくれの成人施設の「重度棟」に生活する人々の発達の姿を「新版K式発達検査」によって把握する。そしてその検査項目のなかの認知、適応領域に属する一検査項目「円板回転」を指標としながら、それと生活習慣の獲得状況との関連をみる。

「円板回転」については、田中⁹⁾によれば、「同次元において対の関係にある2つの要素を1つの単位として視野にいれ、要素間の可逆交通をする」といった特徴をもつ1次元可逆操作の、手一指レベルでの例として説明される。また、1次元可逆操作は、健常児の場合、生後1歳半ごろ獲得されると考えられているが、2歳ごろはこの1次元可逆操作を基礎にしてより高次の2次元の世界に入りこみひろげていく時期にあたっている。

そのように意味づけられる検査項目のできぐあいが、生活習慣にどのように反映されるのかをみたいと考えて「円板回転」を選びだしている。

また、「2歳」は、1歳単位でみた場合の年齢的な区切りの1つであり、認知・適応領域における発達年齢が2歳前を示す者とそれ以上の者として、生活習慣の獲得状況に相異点がみいだせるか否かをもあわせて検討する。

さらに、生活習慣のわくぐみのなかで、それらが相互にどのように関連しあっているのかについても、排尿管の自立を軸としながら考えたい。

これは、排尿管の自立は、とくに重いちえおくれにおいて日常の生活指導のなかで一般的に強く注目される現状があることによる。

いずれにせよ、以上3つの角度からの検討は、大きくは、生活指導全体の計画を系統的なものとすることを展望して行うものである。

II 方 法

精神薄弱者更生施設K園の重度棟在籍者20名についてつぎの2点を実施する。

- ① 新版K式発達検査
- ② 基礎的生活習慣の獲得状況に関する調査

表1 各領域における発達年齢

		姿勢運動 P・N	認知・適応 C・A	C・A-L・S	言語・社会 L・S	全領域
①	Y・T	1:11	0:11	0:7	0:4	0:5
②	H・T	1:11	1:1	0:2	0:11	1:2
③	H・A	1:4	1:3	0:1	1:2	1:3
④	S・T	1:8	1:5	-0:4	1:9	1:6
⑤	K・F	1:11	1:6	-0:3	1:9	1:7
⑥	N・A	3:6	1:6	0:5	1:1	1:7
⑦	M・I	2:11	1:7	0:8	0:11	1:7
⑧	Y・K	1:6	1:8	0:9	0:11	1:6
⑨	K・N	1:6	1:8	0:9	0:11	1:6
⑩	M・M	1:8	1:8	0:7	1:1	1:7
⑪	E・S	>3:6	1:8	0:6	1:2	1:9
⑫	K・Y	2:11	2:0	1:1	0:11	1:10
⑬	M・O					
⑭	A・K	1:8	2:2	0:5	1:9	2:0
⑮	Y・T	2:11	2:1	0:6	1:7	2:0
⑯	S・O	2:11	2:1	-0:10	2:11	2:5
⑰	Y・I	>3:6	2:3	-0:5	2:8	2:6
⑱	M・O	1:6	2:6	1:11	0:7	1:11
⑲	K・K	>3:6	2:9	1:0	1:9	2:5
⑳	S・O	2:11	2:1	-0:10	2:11	2:5

(項目については、Ⅲ結果と考察を参照)

実施期日 1985年7月

なお、①について、1名(M・O)は期日内に実施できなかったため、19名の資料となっている。

III 結果と考察

表1は、新版K式発達検査の3領域および全領域における発達年齢である。〔C・A-L・S〕は、検査から第一義的に導きだされるものではないが、認知・適応領域の発達年齢が言語・社会領域の発達年齢に比べてどの程度うわまわるのかを示している。表2、表3は、同検査の各項目についての合否状況をあらわす。空欄は不合格であったことを示している。なお⑬は、実施していない1名である。一方、基礎的生活習慣の獲得状況は、表4に示し、表5は、それらについて有意差検定を行った結果である。表4の「○—○」はどちらとも判定しがたいこ

表2 下位検査項目の通過状況

園生 性別 生活年齢 検査項目 (認知・適応)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	㉔	
	Y・T	H・T	H・A	S・T	K・F	N・A	M・I	Y・K	K・N	M・M	E・S	K・Y	M・O	A・K	Y・T	S・O	Y・I	M・O	K・K	S・O
	男	男	男	女	女	女	女	女	女	男	女	男	女	男	男	男	女	女	男	男
	23	29	37	25	35	36	23	29	24	45	23	24	23	25	47	37	37	43	28	41
0:8 (8ヶ月)	積木と積木	+MB	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	積木を置く	+MB	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	積木に触れる	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	積木を出す	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	示指を近づける		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	鉄状把握		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
0:9 (9ヶ月)	納先から持つ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	輪を引き寄せる	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	全体隠し	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	円板をはずす	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
0:9	順に遊ぶ		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	コップの上に示す		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	コップに入れる例後		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	釘抜状不完全		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
0:10	小鈴に手を出す	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	小鈴を取る	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	鐘舌に触る		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
0:10	コップに入れる例前		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	釘抜状把握			+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
0:11	入れようとする		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	瓶に入れる例後		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
0:11	片手に2個保持	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	積もうとする			+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	瓶に入れる例前		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
1:0	紐で下げる		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	円板をはめる	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
1:0	なぐり書き例後	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	積木の塔2			+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	丸棒例後1/3			+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	瓶から出す		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
1:3	なぐり書き例前		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	包み込む			+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
1:3	積木の塔3			+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	円板回転		+			+			+	+		+				+	+	+	+	+
1:6	予期的追視	+		+	+	+			+	+		+			+	+	+	+	+	+
	2個のコップ2/3						+			+		+			+	+	+	+	+	+
1:6	積木の塔5					+	+		+	+		+			+	+	+	+	+	+
	角板例後1/3						+	+	+		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	はめ板全						+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	はめ板回転							+			+		+			+	+	+	+	+
1:9	円錯画				+	+	+		+			+	+	+	+	+	+	+	+	+
	入れ子3個				+		+	+		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
1:9	3個のコップ2/3				+							+			+	+	+	+	+	+
	積木の塔6					+			+	+		+			+	+	+	+	+	+
2:0	角板例前					+	+	+		+		+			+	+	+	+	+	+
	形の弁別I 1/5											+			+	+	+	+	+	+

表3 下位検査項目の通過状況

検査項目 (認知・適応)	園生	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	
		Y・T	H・T	H・A	S・T	K・F	N・A	M・I	Y・K	K・N	M・M	E・S	K・Y	M・O	A・K	Y・T	S・O	Y・I	M・O	K・K	S・O	
		性別	男	男	男	女	女	女	女	女	男	女	男	女	男	男	男	女	女	男	男	
		生活年齢 D A	23	29	37	25	35	36	23	29	24	45	23	24	23	25	47	37	37	43	28	41
		0:11	1:1	1:3	1:5	1:6	1:6	1:7	1:8	1:8	1:8	1:8	2:0	MB	2:1	2:1	2:2	2:3	2:6	2:9	2:9	
2:0	積木の塔 8															+	+	+		+		+
	形の弁別 I 3/5																+		+	+	+	+
2:3	横線模倣 1/3												+						+	+	+	+
	縦線模倣 1/3																			+	+	+
2:3	トラックの模倣																+		+			+
	形の弁別 II																					
2:6	折り紙 I												+		+	+	+	+	+	+	+	+
	入れ子 5 個						+			+		+	+		+	+		+	+			+
2:6	記憶板 2/3															+		+				+
	家の模倣																					+
2:6	四角構成 例後																					
	折り紙 II														+			+	+	+	+	+
3:0	円模写 3/1																				+	+
	十字模写例後 3/1																				+	+
3:0	門の模倣 例後																					+
	形の弁別 II 10/10																					
3:6	折り紙 III																			+		+
	人物完成 3/9																				+	+
3:6	十字模写例前 1/3																				+	+
	重さの比較 例後																					+
3:6	門の模倣 例前																					
	四角構成 例前																					
4:0	正方形模写 1/3																				+	
	重さの比較 例前																					+
4:0	積木叩き 2/12																					
	模様構成 I 1/5																					
4:6	人物完成 6/9																				+	
	積木叩き																					
姿勢・運動																						
1:9~2:0	両足とび	+	+			+	+	+				+	+			+	+	+		+	+	
2:0~2:3	跳び降り						+	+				+	+			+	+	+		+	+	
3:0~3:6	ケンケン						+					+	+						+		+	+

とをあらわす。

これをみると、着脱について、一点づつ介助を受けてまたは指導者からの激励によって可能な状態から、みずからひととおりの着脱をおこなう状態への移行、洗面について、うがいをした後のみこんだりまたははきだすがそのあとつづかない状態から、顔を洗うところまで遂行できるまでへの移行、そして入浴について、全面介助の状態から指示すればそれに応じて洗える状態への移行、

それぞれについては、2歳の前後では差があるといえる。しかし、排尿便の失敗の有無や自他の持ち物の区別については、2歳前でも可能となっている例が多く、必ずしも2歳を境として、そのできぐあいに差があるとはいえない。

しかし排尿便の自立については、検査項目の「円板回転」が合格となれば、5%水準で失敗はなくなる傾向にある。つまり、この項目に合格しなければ、「時々失敗

表 4 基礎的生活習慣の獲得状況

		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑳	
① 衣類準備	㊦ 1点ずつ声かけで(種類の区別)				○	○			○	○		○		○	○	○				○	○
	㊧ 1回の声かけで必要衣類全部												○				○	○	○		
② 脱衣	㊦ 1点ずつ介助で	○									○										
	㊧ 1点ずつ声かけで		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○									○
	㊨ 脱衣の声かけで全部脱げる												○	○	○	○	○	○	○		○
③ 着衣	㊦ 1点ずつ介助で	○		○			○				○										
	㊧ 1点ずつ声かけで		○	○	○	○		○	○	○	○	○									○
	㊨ 全部着衣手直し必要				○								○	○	○	○	○	○		○	○
	㊩ 全部着衣手直し不要																○	○			
④ 着脱同時にできる													○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑤ 前後表裏	㊦ 間違えても声かけで直せる												○		○	○	○	○		○	○
	㊧ 間違わない																○	○			
⑥ 排便	㊦ 時々失敗、排尿便介助	○		○	○			○	○												
	㊧ 失敗なし、チリ紙介助		○			○	○			○		○	○	○							○
	㊨ チリ紙を手渡せば使える										○				○	○					○
	㊩ チリ紙を自分で持って行く										○				○	○	○	○	○		
	㊪ 身づくろいもきちんとする																○	○	○		
⑦ 洗面	㊦ 全面介助、介助拒否的	○																			
	㊧ 半介助、うがいのみこむ				○			○	○	○			○								
	㊨ 半介助、うがい吐き出す		○	○	○	○		○			○	○		○			○				
	㊩ 一部介助、うがい、顔こする						○								○	○		○	○	○	○
	㊪ おおむね全部可能																				○
⑧ 入浴	㊦ 全面介助、介助拒否的	○	○								○										
	㊧ 全面介助、少しはやろうとする			○	○	○	○	○	○	○			○		○						
	㊨ 半介助、指示したところは出来る											○	○		○	○					
	㊩ 一部介助、自分でざっと洗う																	○	○	○	○
	㊪ おおむね全部洗える																				
⑨ 他持の物区別	㊦ 時々間違える		○		○			○			○	○				○					
	㊧ おおむねわかる					○			○	○			○	○	○		○	○	○	○	○

表5 項目間の有意差

	着脱一点ずつから自立的着脱へ	排便 時々失敗から失敗なしへ	洗面 全・半介助から一部介助へ	入浴 全面介助から半介助へ	持物 時々まちがえるからわかるへ
認知・適応領域発達 年齢2才前・後	$X^2 = 15.1$ N = 19 P < 0.01 *	$X^2 = 2.86$ N = 19 P > 0.05	$X^2 = 6.05$ N = 19 P < 0.05 *	$X^2 = 6.05$ N = 19 P < 0.05 *	$X^2 = 2.4$ N = 16 P > 0.05
検査項目 円板回転 の合格・不合格		$X^2 = 5.4$ N = 19 P < 0.05 *	$X^2 = 0.52$ N = 19 P > 0.05		$X^2 = 0.25$ N = 16 P > 0.05
洗面◎から○への移行		$X^2 = 0.10$ N = 16 P > 0.05			
着脱1点ずつから自 立的着脱へ		$X^2 = 0.85$ N = 17 P > 0.05			
持物 時々まちがえ るからわかるへ		$X^2 = 0.46$ N = 15 P > 0.05		いずれもdf = 1	
検査項目 ケンケン の合・否		$X^2 = 0.30$ N = 14 P > 0.05			

する」ことが多いといえる。

前記の Webb, R. C. の場合、感覚運動トレーニングのなかにケンケン跳びが含まれているか否か明らかでないが、ケンケン跳びと排便の自立との関連をみると、時々失敗する状態から失敗なしへの移行と、ケンケン跳びの可否とは必ずしも対応していない（下肢障害者4名を除いて検定）。

以上が結果の要点である。これらにかかわって、以下考察をおこなう。

まず、ここに挙げた生活習慣それぞれについて、段階設定の基準を変えれば当然異なった結果がでるという問題がある。着脱の「一点ずつ」という場合、着脱行為そのものよりも、これをして次にあれといった形式の認識をむしろみていると考えられる。そして同じ「一点ずつ」でも、上着あるいは下着をそれぞれ順番に身につけていく「一点ずつ」と、下着から上着への移行あるいは上・下交互に身につけていく場合の「一点ずつ」とは、異なった意味があることも考え得る。同じ2次元の行動であっても、両者の間で困難さの度合いが異なるのかどうかをみるほうが、より衣服の「着脱」に即したものになると考えられる。同様のことは、洗面や入浴における「介助」の中身にもいえるが、それぞれの生活習慣が含みをもつ内容のきめ細かな分析が、今後必要となろう⁴⁾。と同時に、介助等、指導者側から規定した獲得状況の評価よりも、逆に障害者自身のとりくみかたに視点をあてる方向でとらえなおすほうが、一層焦点化して

認知・適応能力の発達との相互関連を把握できるものと考えられる。

また、今回は、横断的な方法をとっているが、それぞれの対象者について、時間の経過を視野にとりこんだ縦断的検討も必要となる。排便について、ここでは5段階に分類しているが、各段階間の移行において、困難の度合いは異なっているものと考えられる。人数のうえて同一段階あるいは同一発達年齢のものを多数抽出することがむづかしい場合には、その点の検討は縦断的方法によらねばならない。また、そのような方法によることが、真に一人ひとりの発達をあとづけ、つぎの獲得課題、指導者にとっては指導課題、を明確にしていくうえでは不可欠であるといえよう。そしてまた、それは、指導者の援助の方法とのかかわりにおいて実態をみることをも意味する。重度知的遅滞者であっても、個人に視点をあてるばかりでなく、小集団による指導の有効性を実験的に示した Storm, R. H.⁶⁾らの指摘をまつまでもなく、集団の発達のなかでの個人の発達をとらえることの重要性が、実践的に数多く提起されている。この先生となら一緒にできる、だれだれさんと組めば活動力がたかまる等々は、今回の対象者の間でもみられることである。ただ言うまでもなく、これは、Lieberman, R. のいうように、グループ指導のほうが、スタッフの数や時間的条件からして経済的であるといった効率論にたつものではない。

つぎに、以上の他にも考慮すべき問題をもちながらも

有意差がみられた項目がいくつかあるが、これらは事実として、独自に検討することが求められる。その作業は今後すすめていくとして、2歳前・後で差が認められる諸課題は、2次元的認識を要求するものであろうし、排便の失敗の有無と「円板回転」との関係でいえば、認知・適応能力の発達を生理学的発達と関連づけて考える必要のあることをうかがわせる。ただ、今回の対象者は、20歳を超える成人であり、発達段階を同じくする健常の乳幼児あるいは障害児と同列に論じられない面もある。いわゆる生活年齢の重みという要因の作用についても、考慮を払う必要がある。

付記 新版K式発達検査は斉藤による。文責は西にある。なお、さまざまな形で御教示いただいた島根県立光風園はまなす棟職員のみなさんに感謝します。

注

- 1) Webb, R. C., & Koller, J. R.; Effects of sensorimotor training on intellectual and adaptive skills of profoundly retarded adults. *American Journal of Mental Deficiency*, 1979, 83, pp. 490-496.
- 2) 坂本憲一；脳性マヒと職業リハビリ，みんなのねがい，1977，No. 98，p. 32.
- 3) 田中昌人；人間発達の科学，青木書店，1980，p.154.
- 4) 山岸春江；障害者の生活における健康保障，介護保障の位置，障害者問題研究，No.16，1978，pp.57-59.
- 5) Storm, R. H., & Willis, J. H.; Small-group training as an alternative to individual programs for profoundly retarded persons. *American Journal of Mental Deficiency*, 1978, 83, pp. 283-288.
- 6) 上記5)の論文中に引用されている。原著は，Lieberman, R.A.; view of behavior modification projects in California. *Behavior Research and Therapy*, 1968, 6, pp. 331-341.